大平正芳氏のこと

ヘンリー・A・キッシンジャー

大平正芳氏と私の交友の歴史は、幾つかの重要な意味において私が日本という国と関わってきた歴史をそのまま反映している。日本人は非常に繊細でありながら、また団結心も強い国民である。意思決定は個人の意思ではなく相互の尊敬に基づく合意を反映するものである。国民全体がいわば一つの大きな家族をなしており、その中にあっては明確な意思表示の必要はほとんどなく、多くの場合、以心伝心、暗黙のうちの理解によって意思の疎通が行われている。これらのことを私が理解するまでにはしばらく時間を要した。

大平氏は日本国民の偉大な指導者であった。同時に米国の良き友人でもあった。とくに、国際政治におけるニュアンスの重要さについて彼から教わるところが多かった。言葉ではなく、むしろ言葉で表現されなかった部分にこそ深い友情が存在していることを、痛切に感じさせてくれたのも大平氏だった。

私が大平氏にはじめて会ったのは一九七二年六月である。日本を訪れた私のために、米国大使館では日本の外相経験者数氏を招待し晩餐会を準備してくれた。私は、なかなかよい企画だと思った。しかし、折しも日本の政局は佐藤首相の後継者選びで揺れ動いていた。そして大平氏はその渦中にある人物の一人と目されていた。だから彼は、まだ面識もなく、しかも日本についてこれまで辛辣な発言の無きにしもあらずだった私に、心の内を明かすつもりは毛頭なかったに違いない。しかし、とにかくその日の晩餐会に同席することになった。大平氏はあまり口はきかれなかった。それでいて、誠意あふれる態度で接しておられることは、そのすばらしく礼儀正しい

物腰のうちに、おのずと伝わってくるのである。この非凡な能力にはまことに感銘を受けたものである。

われわれの付合いは最初は戸惑うようなこともあったが、次第に落着いた友情へと深まっていった。大平氏は日本について根気よく私にいろいろなことを教えてくれた。彼は常に、慎み深い態度の中に豊かな才能を秘めていた。約束した以上のことを実行するのも常であった。大平氏に対する尊敬の念は、後には敬服へと変っていった。この賢明で篤実温厚な人物に対し、私は素直な友情を抱き、その盟友たることを誇りとするようになった。

一九七三年十一月、中東で石油生産が中断された直後、私は国務長官として日本を訪問した。大平氏は当時外務大臣をされていた。彼は、深刻な日本のエネルギー事情の最中にあって、対米関係を調整するという困難な仕事に取り組んでいた。中東問題への米国の対応は、日本が当時直面していた石油危機への対応と一致するものではないと考えていた。そして日本の独自性と米国に対する友好関係を損なうことのない政策を打ち出されたのである。私は大平氏に対し大きな信頼を寄せるようになった。それから三カ月後、ワシントンに先進工業国が集まりエネルギー問題の討議が行われた。各国が問題の核心とはほど遠い些細なことで、自国の面子にこだわったために会議は大荒れに荒れた。しかし大平氏は常と変ることなく、自らは発言を控え、熱心に他の人々の話に耳を傾けていたが、いよいよ会議の最終日になって初めて発言した。そしてこの発言を契機に会議の行詰り状態が打開されることになった。すなわち国際エネルギー機関が創設され、先進工業国間のエネルギー問題に関する常設の協力機関として重要な役割を果すことになったのである。

大平氏は、現代史上の重要事件とも呼ぶべき、日中関係の正常化に中心的役割を果した。一方、国際的に日本の地位と重要性がますます高まる時期にあって、大平氏は日米両国のパートナーシップの強化を唱え、不断の努力を続けた。また、その叡知と達見をもって両国関係の前進に大きく貢献した。彼は経済と外交の両面に精通し

ており、双方が密接な関係を持つことをよく理解していた。さらに、先進工業国の結束の強化という至難な目標に向って大きな足跡を残している。先進国と開発途上国とを問わず、国際関係のすべての面において相互依存が、そして、人類の未来を確実なものとするためには国際協力が不可欠であることも明確に認識していた。大平氏は、自由の大義、平和の大義を推進した旗手であった。同時に、米国の指導者たちは所属政党、政治的信条の別を問わず、一様に大平氏の中に日本の偉大さ、素晴らしさの典型を見出していた。

大平氏と私が最後に会ったのは、一九七九年私が一私人として日本を訪ねた時のことである。私の訪日の世話をしてくれた人々が歓迎レセプションを催してくれた。アメリカ政府の関係者の中には、前政権の閣僚を主賓として迎える催しに出席すべきかどうか迷う者もいた。だが、大平氏にはそのような優柔不断さは微塵もなかった。まったく思いがけなく、数人の閣僚を連れて姿を現わすと、彼は、私を招き、われわれは長い時間二人だけでさまざまなことを語り合った。彼は、多くの問題について持ち前の賢明な判断を示した。この間、大平氏は国務に忙しい立場にあることなどまったく見せなかった。

数日後、大平氏は、日米欧委員会において流暢な英語で演説を行った。会場を去ろうとする彼を呼びとめると、私は、大平氏の英語の演説を聞いて、これまでの私との会談では必要もないのに私の発言を通訳させて、答を考えるための時間かせぎをしていたことが分った、と冗談を言った。彼はにっこり笑うと、頬を私の肩にすり寄せる仕草をした。われわれの間には暖かい友情が通い合っていた。二人は共通の理念の実現に邁進し、試練の時を分ち合った古兵(ふるつわもの)同士であった。

私の公的生活を通じて、大平氏との交友はもっとも懐かしい想い出、もっとも誇り高い経験となっている。私は感謝の念をこめて大平氏の想い出をいつくしむであろう。

（元アメリカ国務長官）